

西原大塚遺跡第138地点 西原大塚遺跡第154地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

埼玉県志木市遺跡調査会

西原大塚遺跡第138地点
西原大塚遺跡第154地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 8

埼玉県志木市遺跡調査会

はじめに

志木市遺跡調査会
会長 白砂 正明

この度、西原大塚遺跡第138地点と154地点の発掘調査報告書が刊行されたことを喜ばしく思います。

西原大塚遺跡では、平成5年度以降に大規模な西原特定土地区画整理事業が実施されていますが、この事業に伴い発掘調査を実施してきました。今回の発掘調査は、こうした事業がほぼ完了に近づき、道路が完備された箇所における各種開発に伴うものと言えましょう。

西原大塚遺跡第138地点については、共同住宅建設に伴い発掘調査が実施されました。幸い駐車場部分は、掘削が深くまで及ばないという理由で、工事による破壊は避けられ、盛土保存で対応することになりました。今回は、建物建設部分に係る箇所で、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の溝跡1本が発見されたため、発掘調査を実施し、記録保存の処置を講ずることになりました。

発見された溝跡は、「V」字状の断面形を特徴とすることから、集落の周囲を環状に囲む「環壕集落」の「環壕」の一部と考えられます。こうした「環壕集落」の例には、有名な「吉野ヶ里遺跡」があり、今回発見された遺構も拠点的な重要な位置を占める集落であった可能性も考えられます。

西原大塚遺跡第154地点については、分譲住宅建設に伴い発掘調査が実施されました。今回の調査では、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡1軒と奈良時代の住居跡1軒などが発見されています。西原大塚遺跡では、これまでの調査で、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡は500軒を超える大集落が形成されていることが判明しています。しかし、今回発見された奈良時代の住居跡は、本遺跡ではこれまで数軒しかありません。そのため、今回の発見で古墳時代後期から平安時代の集落跡が本地点周辺に小規模で存在することが判ってきたと言えるでしょう。

以上、ここでは数例でしか紹介できませんが、この2地点からの貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる1ページが追加されたことは大変喜ばしいことであり、同時に本書が郷土の歴史研究のために広く活用されるよう切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力をいただいた事業主体者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げます。

例 言

1. 本書は、埼玉県志木市に所在する西原大塚遺跡（県No.09-007）第138地点と第154地点の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び整理作業は、志木市教育委員会の斡旋により、以下の開発主体者から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。
西原大塚遺跡第138地点（個人）
西原大塚遺跡第154地点（朝霞市東弁財1-7-24 株式会社リゾン 代表取締役 串崎 純一）
3. 本書の作成において、編集は尾形則敏・深井恵子が行い、執筆は下記以外を尾形則敏が行った。
深井恵子 第2章第2節の遺構、第3章第2～4節の遺構
青木 修 第3章第5節の縄文土器
4. 遺物の実測は、星野恵美子・松浦恵子が行い、遺構・遺物のデジタルトレースは、深井恵子・青木修・鈴木浩子が行った。写真撮影は青木 修が行った。
5. 各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立埋蔵文化財センター・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立難波田城資料館・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立志木第四小学校
会田 明・浅野信英・荒井幹夫・石井 寛・井上洋一・上田 寛・江原 順・大谷 徹・加藤恭朗・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・栗原和彦・黒濟和彦・小出輝雄・肥沼正和・小滝 勉・小宮恒雄・齋藤欣延・坂上克弘・坂本 彰・笹森健一・斯波 治・渋谷寛子・鈴木一郎・鈴木重信・真保昌弘・高崎直成・高橋 学・田中広明・照林敏郎・鍋島直久・根本 靖・野沢 均・早坂廣人・坂野千登勢・藤波啓容・福田 聖・堀 善之・前田秀則・松本 完・松本富雄・望月一樹・三田光明・宮瀧由紀子・柳井章宏・山田尚友・山本 龍・和田晋治・渡辺邦仁

凡 例

1. 本報告書で使用した地図は、以下のとおりである。
第1図 1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製
第2図 1：2,500 ゼンリン電子住宅地図 デジタウン「埼玉県志木市」平成15年8月発行
株式会社ゼンリン
2. 挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3. 遺構挿図版中の水系レベルは、海拔標高を示す。
4. ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。
5. 遺構挿図版中のドットは、遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6. 挿図版中のスクリーントーンについては、画挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは、赤彩範囲を示す。
7. 遺構の略記号は、以下のとおりである。
Y = 弥生時代末葉～古墳時代前期の住居跡 H = 奈良時代の住居跡 D = 土坑
M = 溝跡

志木市遺跡調査会組織

〈役員〉

会長	柚木 博 (志木市教育委員会教育長) (平成17年10月～平成20年3月)
	白砂 正明 (") (平成20年4月～)
副会長	新井 茂 (志木市教育委員会教育政策部長) (平成17年10月～)
理事	神山 健吉 (志木市文化財保護審議会委員長)
	井上 國夫 (志木市文化財保護審議会委員)
	高橋 長次 (")
	高橋 豊 (")
	内田 正子 (")
理事兼事務局長	宮川 英夫 (志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長) (平成18年4月～平成19年3月)
	吉田 洋 (志木市教育委員会教育政策部生涯学習課長) (平成19年4月～)

〈監査〉

監事	原田 隆一 (志木市教育委員会教育総務課長) (平成18年4月～平成20年3月)
	鈴木 幸治郎 (志木市出納室長) (平成18年4月～)
	菊原 龍治 (志木市教育委員会教育総務課長) (平成20年4月～)

〈事務局〉

担当課	志木市教育委員会教育政策部生涯学習課
理事兼事務局長	宮川 英夫 (教育政策部参事兼生涯学習課長) (平成18年4月～平成19年3月)
	吉田 洋 (志木市教育委員会教育政策部生涯学習課長) (平成19年4月～)
事務局	土岐 隆一 (生涯学習課副課長) (平成20年4月～)
	醍醐 一正 (生涯学習課主幹) (平成18年8月～平成19年3月)
	今野 美香 (") (平成19年4月～11月)
	大熊 克之 (") (平成19年12月～)
	佐々木 保俊 (生涯学習課主査) (昭和61年～)
	尾形 則敏 (生涯学習課主任) (昭和62年～)
	松永 真知子 (") (平成18年4月～)
	高野 雅也 (") (平成20年4月～)

〈発掘調査〉

調査担当者	尾形 則敏
調査員	深井 恵子
調査補助員	青木 修
調査協力員	鈴木 浩子・星野 恵美子・松浦 恵子
重機オペレータ	田中 三二 (大塚屋商店)

〈整理作業〉

調査員	深井 恵子
調査補助員	青木 修
整理協力員	鈴木 浩子・星野 恵美子・松浦 恵子

目 次

はじめに

例 言／凡 例／志木市遺跡調査会組織／目 次／挿図目次／表 目 次／図版目次

第1章 遺跡の立地と環境	1
第1節 市域の地形と遺跡	1
(1) 地理的環境と遺跡分布	1
(2) 歴史的環境	3
第2節 遺跡の概要	6
第2章 西原大塚遺跡第138地点の調査	9
第1節 調査の経過	9
(1) 調査に至る経過	9
(2) 発掘調査の経過	11
第2節 弥生時代後期末葉～古墳時代前期の遺構・遺物	11
第3節 遺構外出土遺物	13
第3章 西原大塚遺跡第154地点の調査	14
第1節 調査の経過	14
(1) 調査に至る経過	14
(2) 発掘調査の経過	15
第2節 弥生時代後期末葉～古墳時代前期の遺構・遺物	16
第3節 奈良・平安時代の遺構・遺物	18
第4節 中世以降の遺構・遺物	20
第5節 遺構外出土遺物	21
第4章 調査のまとめ	24

図 版

報告書抄録

挿図目次

第1図	市域の地形と遺跡分布 (1/20000)	2
第2図	西原大塚遺跡の調査地点 (1/5000)	7
第3図	遺構分布図 (1/200)	10
第4図	40号溝跡・出土遺物 (1/60・1/3)	12
第5図	遺構外出土遺物 (1/3)	12
第6図	確認調査時の遺構確認状況 (1/300)	14
第7図	遺構分布図 (1/150)	15
第8図	537号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)	17
第9図	19号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4)	19
第10図	604号土坑 (1/60)	21
第11図	遺構外出土遺物 (1/3)	22

表目次

第1表	志木市埋蔵文化財包蔵地一覧	1
-----	---------------	---

図版目次

図版1	西原大塚遺跡第138地点
	1. 調査区近景 2. 確認調査風景 3. 調査風景 4・5. 40号溝跡遺物出土状態 6・7. 40号溝跡 8. 出土遺物
図版2	西原大塚遺跡第154地点
	1. 調査区近景 2. 表土剥ぎ風景 3. 調査風景 4・5. 537号住居跡遺物出土状態 6. 537号住居跡貯蔵穴 7. 537号住居跡貯蔵穴遺物出土状態 8. 537号住居跡
図版3	西原大塚遺跡第154地点
	1・2. 537号住居跡炉跡 3. 19号住居跡 4. 19号住居跡P1付近 5. 19号住居跡遺物出土状態 6. 19号住居跡カマド 7. 19号住居跡・604号土坑 8. 604号土坑
図版4	西原大塚遺跡第154地点
	1. 537号住居跡出土遺物 2. 19号住居跡・1号ピット出土遺物 3. 遺構外出土遺物

第1章 遺跡の立地と環境

第1節 市域の地形と遺跡

(1) 地理的環境と遺跡分布

志木市は、埼玉県南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりを持ち、面積は9.06km²、人口約6万8千人の自然と文化の調和する都市である。

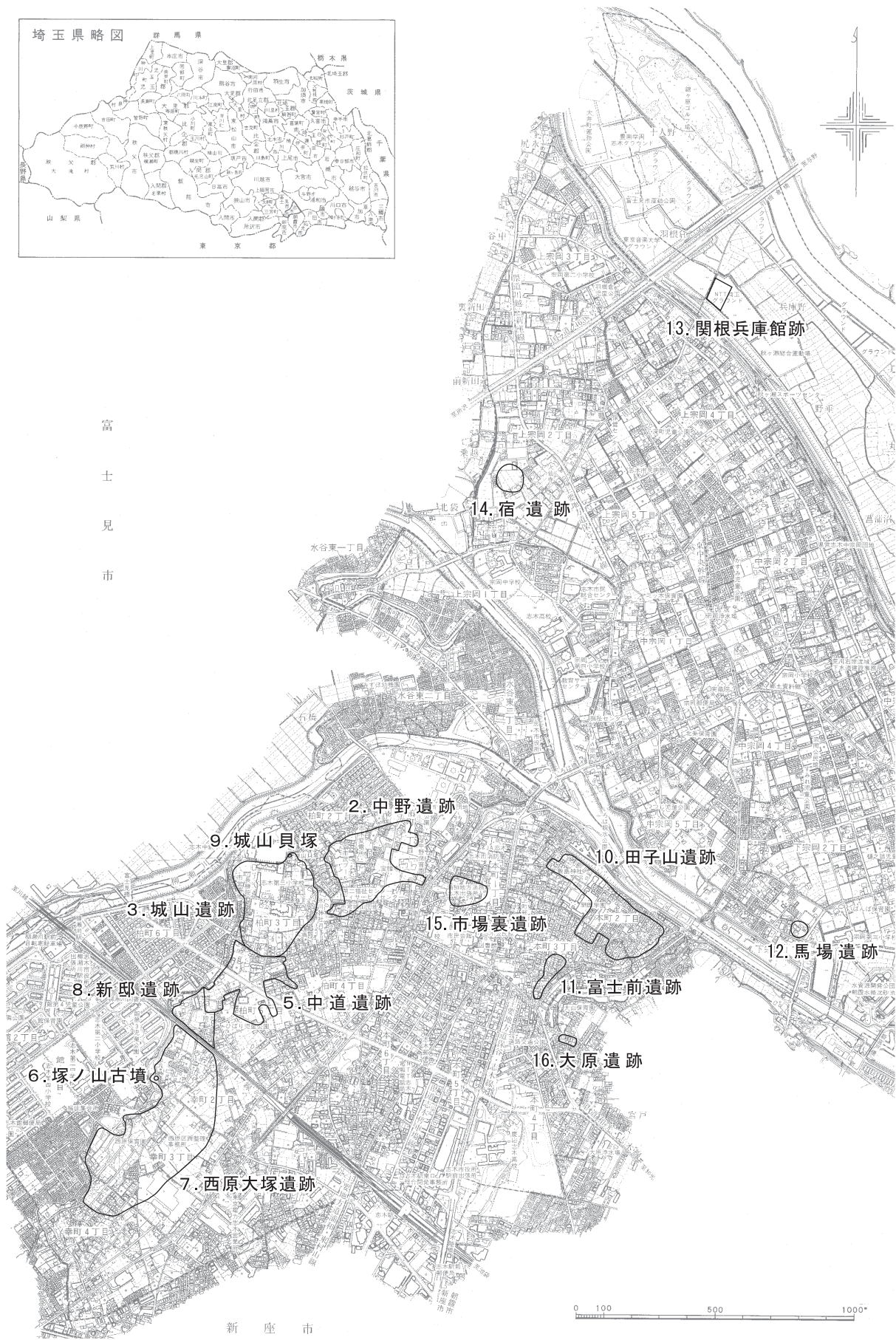
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が広がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の3本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、市内遺跡の大部分は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に分布している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（7）、中道遺跡（5）、新邸遺跡（8）、城山遺跡（3）、中野遺跡（2）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）の順に

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	63,010 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	78,700 m ²	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、铸造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、铸造関連遺物等
5	中道	45,860 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～後）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚ノ山古墳	800 m ²	林	古墳?	古墳?	なし	なし
7	西原大塚	163,930 m ²	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	16,400 m ²	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄（早～中）、古（前～後）、中・近世、近代	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 m ²	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	62,200 m ²	畑・宅地	集落跡	縄（草創～晩）、弥（後）、古（後）、奈、平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100 m ²	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 m ²	畑	集落跡	古（前）	住居跡?	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 m ²	グラウンド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 m ²	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	10,700 m ²	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、近代	住居跡・方形周溝墓	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大原	1,700 m ²	宅地	不明	近世以降?	溝跡	なし
合計		466,700 m ²					

平成20年3月31日 現在

第1表 志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第1図 市域の地形と遺跡分布 (1/20000)

名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した12遺跡に塚の山古墳（6）、城山貝塚（9）を加えた14遺跡である（第1図）。

（2）歴史的環境

ここでは、市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

1. 旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、柳瀬川右岸の中野・城山・中道・西原大塚遺跡で確認されている。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う発掘調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

西原大塚遺跡では、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査により、石器集中地点が検出されている。石器集中地点は、平成6（1994）年度には2ヶ所、平成7（1995）年度には1ヶ所が検出され、ナイフ形石器・剥片などが発見されている。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層の第Ⅳ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

平成13（2001）年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点では、立川ローム層の第Ⅳ層上部と第Ⅶ層の2ヶ所で石器集中地点が確認され、黒曜石・安山岩・チャート・頁岩などの抉入石器・剥片など32点が出土している。

2. 縄文時代

縄文時代では、西原大塚遺跡を中心に中期後葉の遺跡が集中し、城山貝塚の周辺の城山遺跡からは、前期末葉（諸磯式期）の住居跡や土器がやや多く検出される傾向にある。

ここでは、時代の推移に従って説明することにする。まず、草創期では、平成4（1992）年に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器1点と平成10（1998）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器1点が出土しているのみである。

早期では、遺構の検出例はまだ少ないが、住居跡としては、平成18（2007）年に発掘調査が実施された中道遺跡第65地点で検出された早期末葉（条痕文系）の10号住居跡1軒が最古のものと言える。土器としては、田子山遺跡で撚糸文・沈線文・条痕文系土器が出土しているが、御嶽神社を中心とする東側でやや多く出土する傾向がある。また、富士前・新邸・城山遺跡からは、撚糸文系土器が数点出土し、条痕文系土器は、中野・田子山遺跡では炉穴に伴い出土している。

前期では、西原大塚・新邸遺跡で黒浜式期の住居跡、城山遺跡では諸磯式期の住居跡3軒が検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成2年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

中期になると遺跡が最も増加する。特に、中期中葉から後葉の勝坂式～加曾利E式期にはその傾向が強くなり、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で住居跡を中心に土坑が検出されている。特に西

原大塚遺跡では、住居跡が環状に配置していることが判明しつつある。

中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が1軒確認されるのみである。

後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡1軒と加曾利B式期の住居跡1軒、遺物集中地点1ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点で、土坑1基が検出され、下層から称名寺I式期の土器、上層からII式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも2基の土坑が検出されている。

晩期では、中野・田子山遺跡から安行ⅢC式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では弥生時代後期まで空白の時代となる。

3. 弥生時代～古墳時代前期

弥生時代では、現時点において、前・中期の遺跡は検出されていないが、後期末葉から古墳時代前期と考えられる遺跡が数多く検出されている。中でも、平成6（1994）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が500軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

また、当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）年以降、西原大塚・田子山・市場裏遺跡の3遺跡から確認されてきたが、最新では、平成15（2003）年に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点と平成18（2006）年に実施された中道遺跡第65地点でそれぞれ1基を加えることにより、従来認識されていた集落跡と1つの単位的なまとまりをもって点在することが明らかになってきたと言えるであろう。

市内で最も多く方形周溝墓が検出されている西原大塚遺跡では、10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。また、平成11（1999）年に発掘調査が実施された西原大塚遺跡第45地点では、一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が発見されている。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の3要素の特徴を示す壺が出土しており、こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

4. 古墳時代中・後期

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。その中で、西原大塚遺跡に隣接する新邸遺跡で検出されている第2地点の1号住居跡と平成15（2003）年に発掘調査が実施された第8地点の2～8号住居跡は、古墳時代前期でも比較的新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、現時点では隣接する西原大塚遺跡から継続し広がった集落跡

ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。その中でも、平成7（1995）年に発掘調査が実施された中道遺跡第37地点19号住居跡は、5世紀中葉に比定され、カマドをもつ住居跡としては市内最古のものである。

5世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に6世紀後半から7世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的古い5世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、6世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では第8地点で初めて古墳時代後期（7世紀中葉）の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、3×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、5世紀後半から7世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で1軒を数える。

また住居跡以外では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、6世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整円形で2ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が1基確認されている。さらに、平成14（2002）年に発掘調査された田子山遺跡第81地点を契機に御嶽神社を取り囲むように外周で推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかという見方が浮上している。

5. 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、現在のところ、中野・城山・中道・西原大塚・田子山遺跡で検出されている。中でも城山・田子山遺跡はこの時代を代表とする遺跡として挙げるることができる。城山遺跡では、平成8（1996）年に発掘調査が実施された第35地点の128号住居跡から、印面に「冨」1文字が書かれた完形品の銅印が出土しているが、これは県内でも稀少な例で貴重な資料である。この住居跡からはその他、須恵器坏や猿投産の緑釉陶器の小破片1点、布目瓦の小破片2点などが出土している。

田子山遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された第24地点からは、住居跡の他、掘立柱建築遺構・溝跡そして100基を越える土坑群が検出されている。平成6（1994）年に発掘調査が実施された第31地点の44号住居跡からは、腰帯の一部である銅製の丸柄が出土している。さらにカマド右横の床面上からは、東金子窯跡群の前内出製品と鳩山製品の須恵器坏が1点ずつ出土し、土器編年の基本資料として貴重であると言える。

6. 中・近世

中・近世の遺跡は、「柏の城」を有する城山遺跡と千手堂関連である新邸・中道遺跡、そして関根兵庫館跡・宿遺跡が代表的な遺跡と言える。

城山遺跡では、数次にわたる発掘調査により、『^{たてむらきゅうき}館村旧記』（註1）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。最新では、『^{かいこくざっき}廻回雑記』（註2）に登場する「^{おおいしなの}大石信濃

かみのやかた
守館」が「柏の城」に相当し、「大塚十玉坊」についても市内の「大塚」に由来があるという説が有力と言えるであろう（神山 1988・2002）。また、平成7（1995）年に発掘調査が実施された第29地点の127号土坑からは、馬の骨が検出されている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、第35地点では、鑄造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鑄造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鑄型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。また平成13年の第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる風習が志木市でも実在していた可能性が高い。

平成11～14（1999～2002）年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からは、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『館村旧記』に記載がある「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

中道遺跡では、昭和62（1987）年の第2地点から人骨を伴う地下式坑、掘立柱建築遺構が検出され、平成7（1995）年の中道遺跡第37地点からは、人骨と古銭5枚を出土した土坑墓1基と13世紀に比定される青磁盤1点を出土した道路状遺構1条が検出されている。

新邸遺跡では、昭和60（1985）年の第1地点から段切状遺構の平場から多数の土坑・地下式坑が検出され、平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、人骨と六文銭を伴う火葬墓2基が検出されている。おそらく、この新邸遺跡から中道遺跡一帯は、『館村旧記』に記載がある「大塚千手堂」であり、古くは天台宗の「七堂大伽藍」を誇る「松林山観音寺大受院」しょうりんざんかんのんじだいじゅいん関連遺構として、今後は体系的な究明が必要とされるであろう。

7. 近代以降

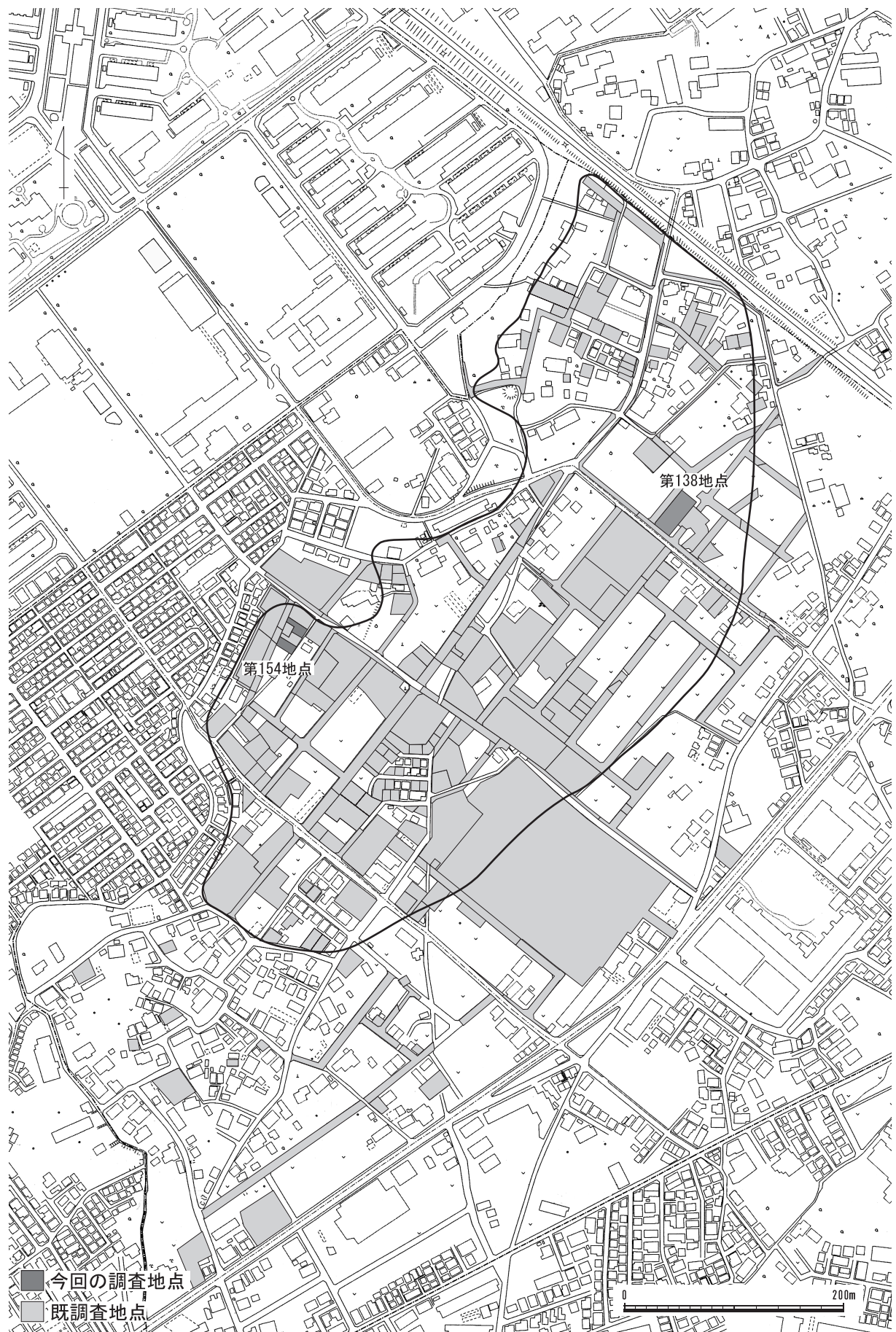
近代以降の遺跡では、平成5（1993）年に発掘調査が実施された田子山遺跡第31地点から、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治2～5年）に関連するローム採掘遺構が検出されている。この遺構の坑底面からは、鋤・鍬などの無数の工具痕が観察され、採掘作業がかなり組織的な単位で行われていたこともわかり、地域研究の重要な資料と言える。

平成15（2003）年の新邸遺跡第8地点からは、野火止用水跡が検出され、市内初の発掘調査例となった。用水路の基盤面からは水付きの銹着面が確認され、底面からは大量の陶磁器が出土した。

第2節 遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する西原大塚遺跡について概観することにする。

西原大塚遺跡は、志木市幸町3丁目を中心に存在する遺跡で、東武東上線志木駅の1km程西方に位置している。本遺跡は、北東－南西方向に約700m、北西－南東方向に約150mほどの広がりを持ち、面積



第2図 西原大塚遺跡の調査地点 (1/5000)

平成20年3月31日 現在

約164,000㎡を有する市内最大規模の遺跡である。

遺跡を地勢的に見ると、武蔵野台地の北端部にあたり、標高は遺跡南端で約19m、北端で約14mを測り、大略南から北にかけて序々に標高が低くなっている。崖線部は西側でゆるやかな傾斜地になっているが、北側では際立った断崖地形に変化している様子が観察される。この遺跡の北西方向には柳瀬川が北東流し、さらに崖下にはいくつもの湧水地があったという記録もあることから、古より生活するためには欠かすことのできない飲料水が豊富にあったものと想像される。

遺跡の現況は、大部分が畑地であるが、平成5年度以降、この地域内で西原特定土地区画整理事業が本格的に開始されており、これに伴う道路部分の発掘調査が急ピッチに遂行されてきた。そして、この事業に伴う発掘調査は、平成18年度に完了したが、今後、道路の完成に付随して個人住宅・共同住宅建設などの小・中規模開発が急増することが予想される。そのため、この遺跡での埋蔵文化財の保存事業については、これからが、本当の意味で開始と言えるであろう。

本遺跡は、昭和48年に第1回目の発掘調査が実施され、以後の調査から、旧石器時代、縄文時代前～晩期、弥生時代後期、古墳時代前・後期、奈良・平安時代、中・近世の複合遺跡であることが判明している。

【註】

註1 『館村旧記』は、館村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主宮原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

註2 『廻回雑記』は、左大臣近衛房嗣の子で、京都聖護院門跡をつとめた道興准后が、文明18年（1486）6月から10ヶ月間、北陸路から関東各地をめぐり、駿河甲斐にも足をのぼし、奥州松島までの旅を紀行文にまとめたものである。

【引用文献】

神山健吉 1988 「『廻回雑記』に現れる 大石信濃守の館と十玉坊の所在についての一考察」『郷土志木』第7号
2002 「道興をめぐる二つの謬説を糾す」『郷土志木』第31号

第2章 西原大塚遺跡第138地点の調査

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経過

平成18年12月、東洋建設株式会社から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市幸町2丁目3064、3065、3066、3071の各一部（面積674.65㎡）に共同住宅建設を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228-007）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 本地点は埋蔵文化財包蔵地に該当し、周辺の調査でも埋蔵文化財が検出されており、遺構が検出されることが予想される。
2. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
3. 上記2の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

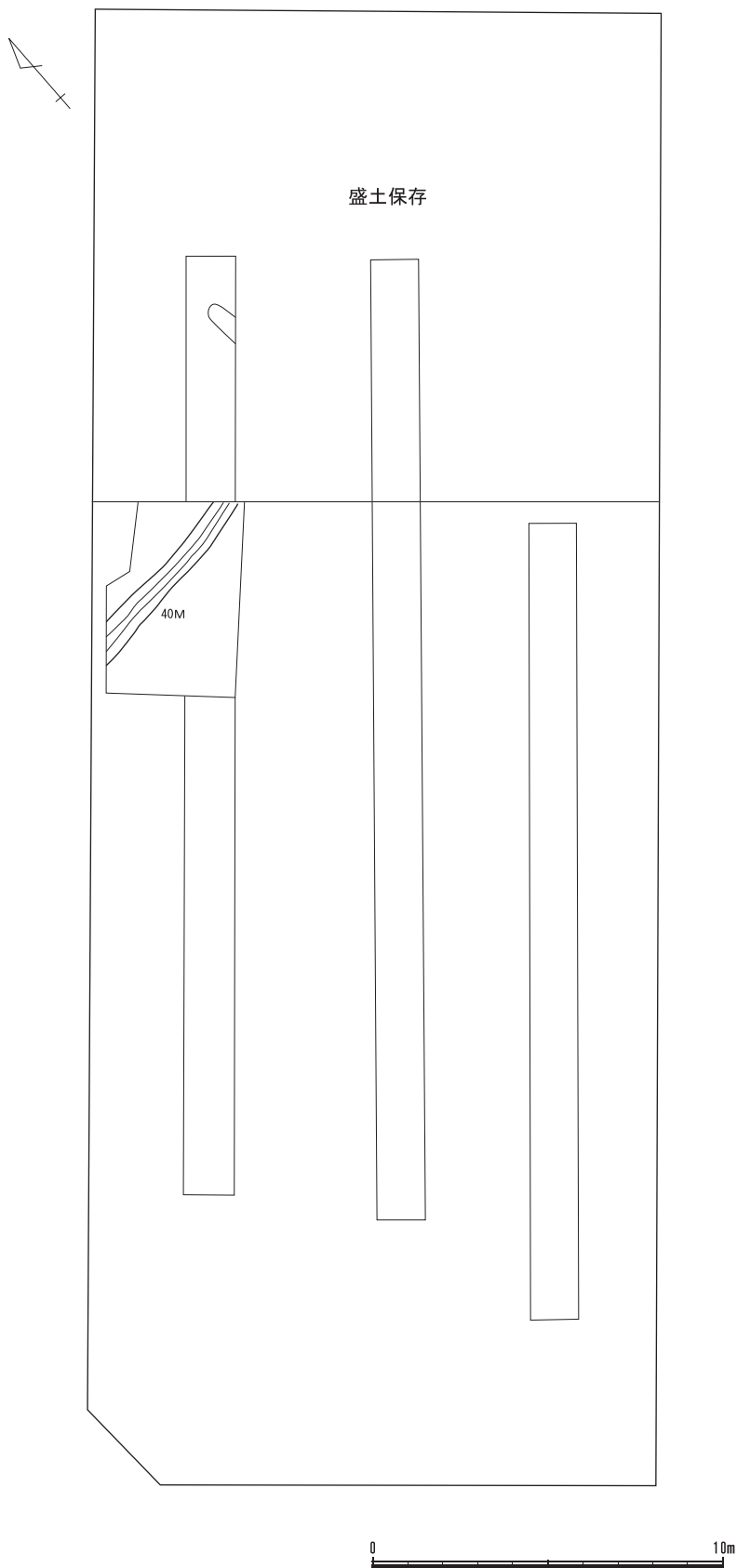
平成18年12月4日、教育委員会は、開発主体者である個人より埋蔵文化財発掘届と確認調査依頼書を受理した。これを受け、12日に開発主体者と東洋建設株式会社との現地打合せを実施する。内容は、確認調査の方法と日程、調査後の文化財の取り扱いなどについてである。

確認調査は、12月25日に実施した。調査区長軸に合わせ3本のトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区北西隅から溝跡1本と土坑1基と思われる遺構を確認した。特に溝跡については、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査で検出された溝跡の延長部分に相当し、弥生時代後期末葉から古墳時代前期の環壕の一部と推定される。

そのため、ただちに開発主体者及び東洋建設株式会社に調査の結果を報告し、保存のための協議を行った。その結果、駐車場建設の予定箇所内から検出された遺構については、保護層を確保するという条件で、盛土保存を適用することが可能となった。しかし、建物建設の予定箇所内で検出された遺構については、計画を変更することは不可能であるということから、面積20㎡分の発掘調査を実施することに決定した。

また、開発主体者から教育委員会に発掘調査の依頼があったため、教育委員会では発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、開発主体者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。その後、教育委員会は、届出書をすみやかに埼玉県教育委員会に提出した。

これにより、平成19年2月5日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、発掘調査通知書番号は教生第2-87号 平成19年3月1日付である。



第3図 遺構分布図 (1/200)

(2) 発掘調査の経過

本地点の調査は、表土剥ぎ作業から埋戻し作業に至るすべてを2月5日の1日で完了した。以下、調査の経過を説明する。

まず、発掘調査を実施する面積20㎡分の位置を工事設計図から調査範囲とし設定し、その範囲内の表土剥ぎ作業をバックホーを使用し開始する。同時に器材搬入作業を行い、人員導入による発掘調査を開始した。

その後、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行い、溝跡(40M)を確認し、精査前の全体写真の撮影を行った。

精査は、狭小な面積であったため、調査区境界でのセクションA・Bを設定することとし、全体を一斉に掘り下げることにした。午前中には掘りを終了、写真撮影を完了する。

午後からは、実測を終了し、器材の片付けを行い、器材搬出作業を完了。3時過ぎには重機による埋戻し作業を開始し、同日完了する。以上をもって発掘調査を完了する。

第2節 弥生時代後期末葉～古墳時代前期の遺構・遺物

40号溝跡

遺 構 (第4図)

[構造] 調査区北西隅から検出された。(規模) 確認できた範囲では、全長6.0m・上幅58～94cm・下幅16～24cm。(深さ) 25～41cm。(断面形) やや逆台形を呈するが、基本的には「V」字形である。(走向角度) N-83°-E。(覆土) 4層に分層される。

[遺物] 土器小破片が僅かに出土した。

[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

[所見] 本遺構は、「V」字形を基本とする断面形をもつことから、環壕の一部と考えられる。

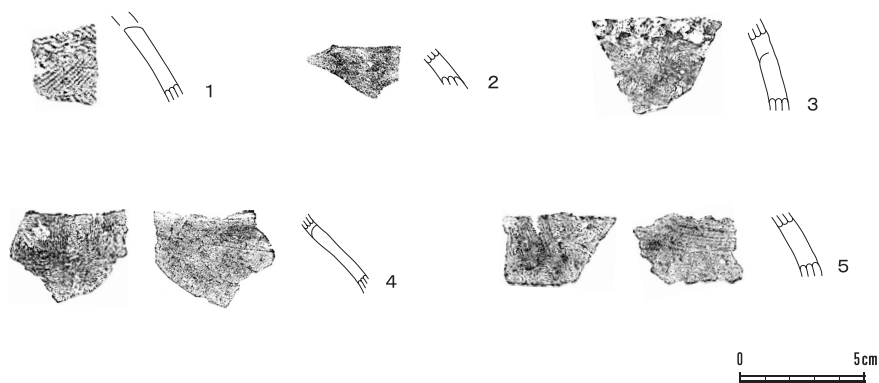
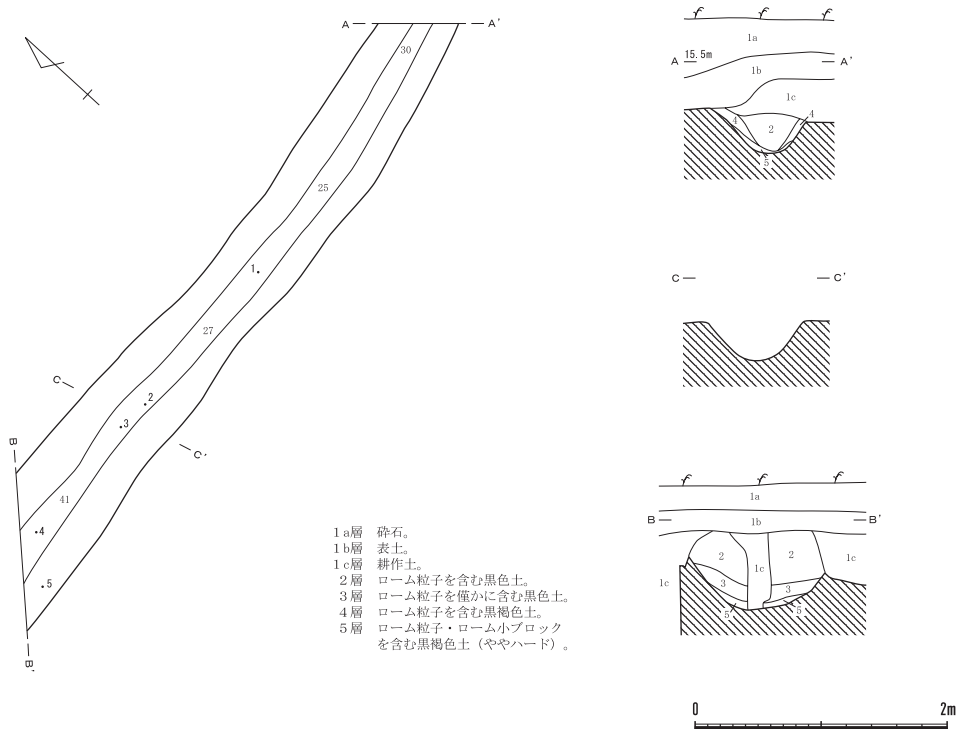
遺 物 (第4図)

壺形土器 (1～3)

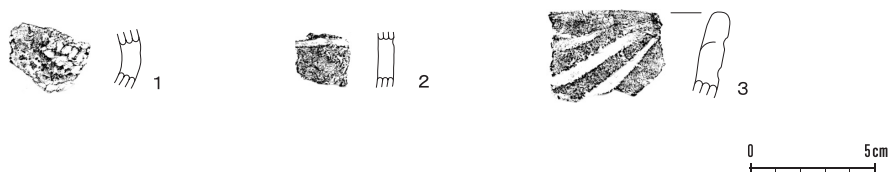
1は胴部上半部の小破片で、羽状縄文と自縄結節文が施文される。色調は暗橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデが施される。2・3は胴部小破片で、外面が赤彩される土器である。2は胎土の色調が暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ磨き調整が施される。3は胎土の色調が暗黄褐色を基調とし、茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ磨き調整が施される。

甕形土器 (4・5)

4は頸部から胴部上半部の破片で、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内面は頸部にハケ目調整、胴部にヘラナデが施され、外面は頸部が縦方向、胴部に横方向のハケ目調整が施される。5は胴部小破片で、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む。内外面にハケ目調整が施される。



第4図 40号溝跡・出土遺物 (1/60・1/3)



第5図 遺構外出土遺物 (1/3)

第3節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物は少なく、図示できたのは、縄文土器が3点であった（第5図）。

1は胴部小破片で、LR縄文が施される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。

2は胴部小破片と思われる。器面には沈線文が1本施文されている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。

3は口縁部破片で、口縁部に斜方向に3本の沈線文が施文される。色調は淡黄褐色を呈し、胎土には砂粒・小石を含む。

以上、1は中期中葉の勝坂式土器、2は後期前葉の堀之内式土器、3は晚期中葉の安行3c式土器と考えられる。

第3章 西原大塚遺跡第154地点の調査

第1節 調査の経過

(1) 調査に至る経過

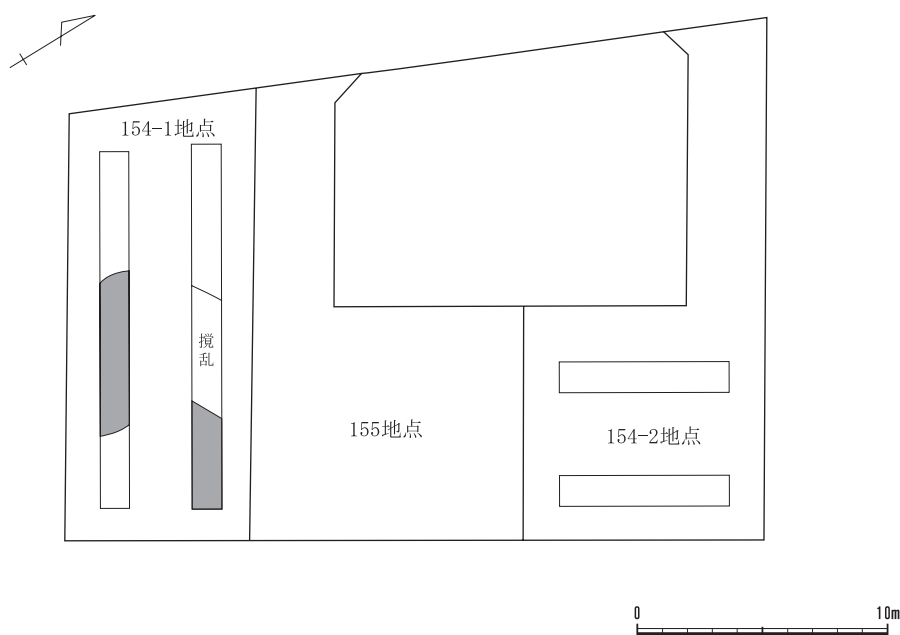
平成20年3月、株式会社リゾンから志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市幸町3丁目54街区9-2・4画地に2棟の分譲住宅建設（全面積240.20㎡／9-2画地120.00㎡／9-4画地120.20㎡）を実施するというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である西原大塚遺跡（コード11228-007）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

1. 本地点は埋蔵文化財包蔵地に該当し、周辺の調査でも埋蔵文化財が検出されており、遺構が検出されることが予想される。
2. 埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。
3. 上記2の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

平成20年3月4日、教育委員会は、開発主体者の株式会社リゾン（代表取締役 串崎純一氏）より埋蔵文化財発掘届と確認調査依頼書を受理した。これを受け、6日に確認調査を実施することに決定した。

確認調査は、2棟分の対象地にそれぞれ2本ずつのトレンチを設定し、バックホーを使用し表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った（第6図）。まず、54街区9-4画地（154-2地点）から調査を開始



第6図 確認調査時の遺構確認状況（1/300）

したが、すでに上層はローム層まで削平され宅地造成が行われているものと判断できた。その結果、すでにローム面は露出している状態であり、遺構・遺物は検出できなかった。54街区9-2画地（154-1地点）についても同様であると想定したが、調査を実施してみると、すでにローム面は露出している状態であったが、部分的に焼土や住居跡の床硬化面と思われる箇所を確認することができた。これらの遺構は、出土土器から判断して、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡2軒と考えられる。

そのため、ただちに株式会社リゾンに調査の結果を報告し、正式には13日に事前協議を行った。その結果、表土の厚さが存在しない状態での保護層30cmを確保するという条件をクリアーするのは不可能であるという回答を得たため、54街区9-2画地（154-1地点）に関しては、発掘調査を実施することに決定した。

その後、開発主体者から教育委員会に発掘調査の依頼があったため、教育委員会では発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、開発主体者と委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。その後、教育委員会は、発掘届と発掘調査届をすみやかに埼玉県教育委員会に提出した。

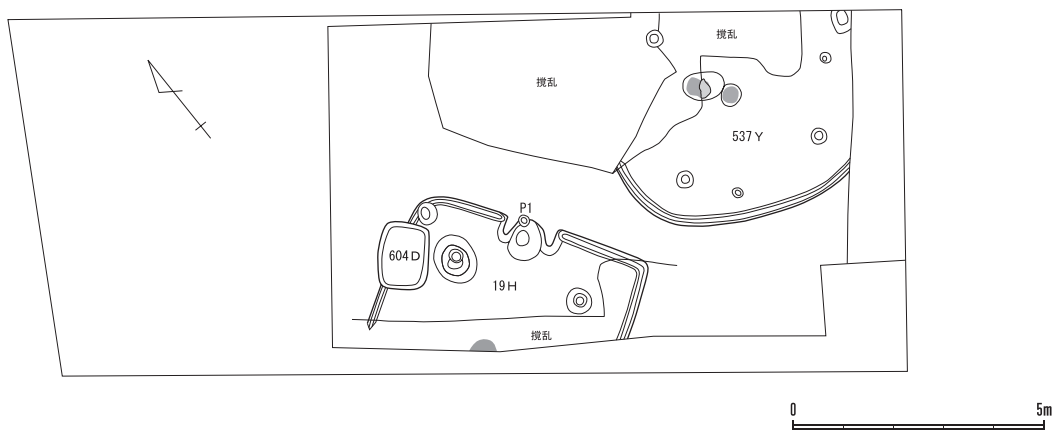
これにより、平成20年3月17日から遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、発掘調査通知書番号は教生第2-73号 平成20年3月31日付である。

（2）発掘調査の経過

3月17日 人員導入による発掘調査を開始した。まず、調査区域内の整備と細部の遺構確認作業を行った。その結果、調査区内には、住居跡2軒と土坑1基を確認することができた。2軒の住居跡は上面がかなり削平され遺存状態は悪く、一部は既に床硬化面が露呈していた。

同日には、弥生時代後期末葉～古墳時代前期と思われた調査区南側の住居跡とこれを切る土坑（604D）の精査を開始した。住居跡については、確認調査の際既に焼土範囲を確認していたが、本調査の遺構確認で東壁のほぼ中央に焼土とその左右に粘土や砂利混じりの灰褐色土の広がる範囲を確認したため、焼失住居の焼土と祭壇状遺構として捉えた。

604Dからは弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器小破片が出土したが、時期については覆土の観察から中世以降のものと考えられる。604Dについては完掘し、写真撮影・実測を終了した。



第7図 遺構分布図（1/150）

18日 調査区南側の住居は弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡と考えていたが、焼土範囲周辺の精査を続けると坑底面には被熱面とさらに微隆なロームによる両袖部が確認できたため、カマドと再認識し、住居跡の時期の再設定を行うこととした。その際、南壁溝上層から、底部に周辺ヘラ削り調整を施す須恵器坏が出土したことを合わせて考慮し、奈良時代（8世紀前葉）のカマドをもつ住居跡であると判断した。そのため、遺構名を19号住居跡（19H）として調査を継続した。

19Hは柱穴・壁溝の掘りを終了し、その後写真撮影を行い、平板測量を終了した。もう1軒の住居跡については、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の住居跡として、537Yとし精査を開始する。537Yは壁溝・貯蔵穴・柱穴を掘り終え、完掘する。

19日 19Hは断面実測終了の後、掘り方・カマドの精査・実測を終了した。

537Yは写真撮影を行い、その後、平板測量・実測を終了した。併行して、全測図を完了し、すべての精査を完了した。

その後、器材の片付けを行い、器材搬出作業を行った。

埋戻し作業については、行わないということに決定していたため、本日をもってすべての調査を完了する。

第2節 弥生時代後期末葉～古墳時代前期の遺構・遺物

537号住居跡

遺 構（第8図）

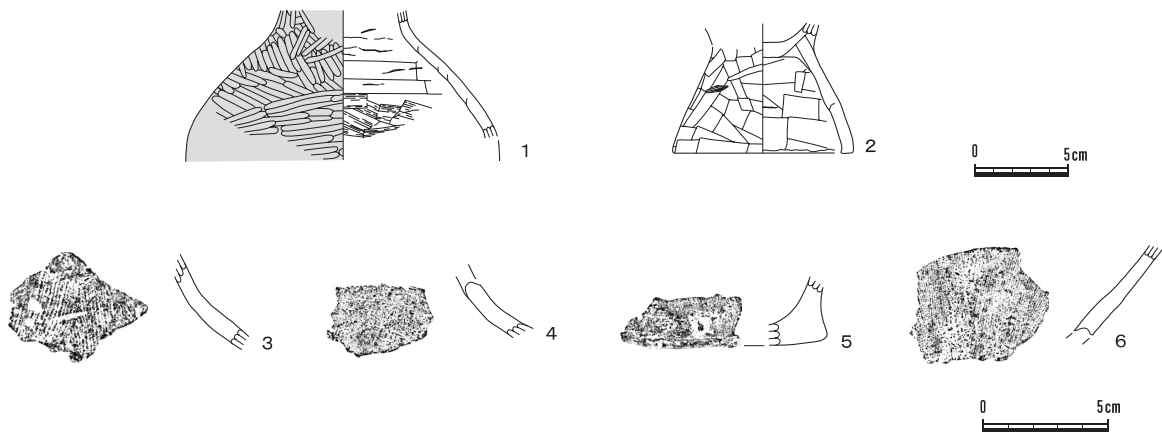
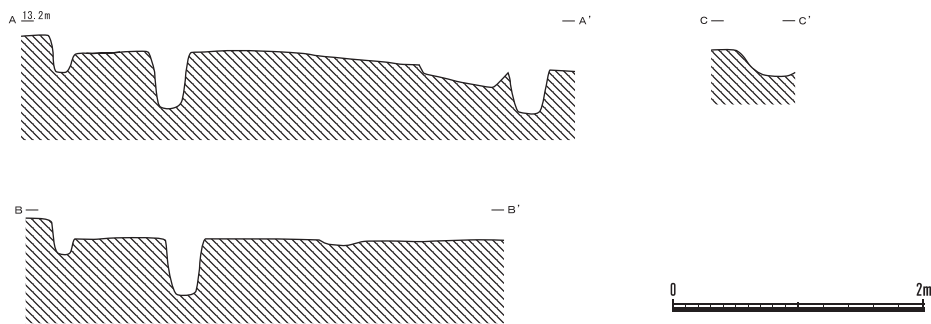
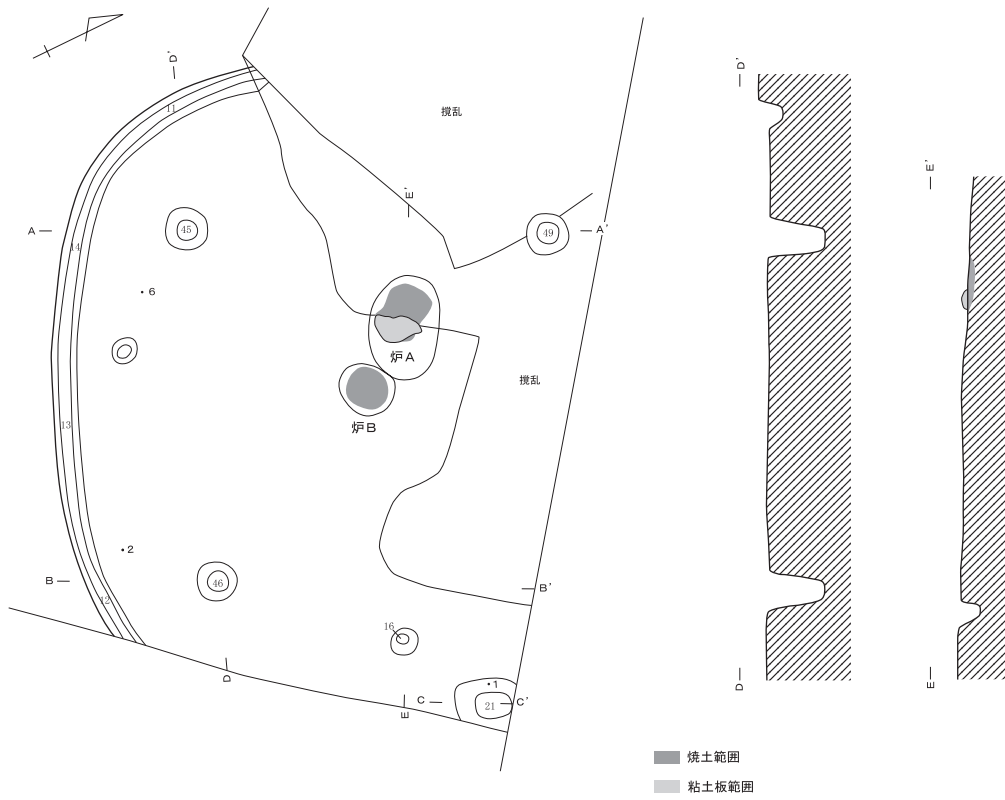
[住居構造] 北側と南東側は攪乱により壊されている。住居北東壁は調査区域外である。（平面形）隅丸長方形。（規模）5.60×5.20m。（壁高）比較的に残りの良い西コーナーで19cmを測る。（壁溝）確認できた範囲では巡らされていた。上幅14～20cm・下幅6～8cm・深さ11～14cmを測る。（床面）全体的に良く硬化している。（炉）A・B2ヶ所が確認できた。Aは住居中央よりやや北西に偏って位置する。西側の上層は攪乱により壊されていた。83×55cmの楕円形を呈し、掘り込みはほとんどなかった。厚さ3cm・40×22cmの粘土板が残存していたことから、粘土板炉であったと思われる。粘土板の下は焼けて赤化していた。Bは住居のほぼ中央に位置する。46×40cmの楕円形を呈し、中央が6cm程窪んだ地床炉である。炉床は焼けて赤化していた。（柱穴）支柱穴は4本と思われ、そのうちの3本が確認された。深さは45～49cmを測る。住居東側の深さ16cmのものは入口ピットと思われる。（貯蔵穴）南東壁の東コーナーに偏って位置する。平面形は隅丸方形で、56×45cm・深さ21cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。（覆土）焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

[遺物] 壺・甕の破片が出土した。

[時期] 弥生時代後期末葉～古墳時代前期。

遺 物（第8図）

壺形土器（1・3～5）



第8図 537号住居跡・出土遺物 (1/60・1/4・1/3)

1は現器高8.0cm・胴部最大径16.4cm。頸部から胴部にかけては屈曲しないやや細頸タイプで、胴部中位に最大径をもつ。外面は赤彩される。胎土は暗黄褐色を呈し、黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面には部分的にハケ目痕が残るが、内面はヘラナデ、外面は全面ヘラ磨き調整が施される。貯蔵穴内からの出土で、頸部から胴部中位にかけてを30%程遺存する。

3・4は頸部から胴部上半にかけての小破片である。3は色調が暗橙色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面は剥落し遺存状態が悪いが、ヘラ磨き調整であろう。外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整が施される。4は色調が暗橙色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。いずれも外面が赤彩され、覆土中からの出土である。

5は底部小片である。色調は暗赤褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面はハケ目調整が施される。貯蔵穴内からの出土である。

甕形土器（2・6）

2は台付甕の脚台部である。現器高6.8cm・底径9.6cm。「ハ」字状を呈する。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を含む。内外面はヘラナデを基本とするが、弱いハケ目痕が見られることからハケナデの類であろう。南コーナー寄りの床面上からの出土で、脚台部を80%程遺存する

6は胴部小破片である。色調は黒褐色を呈し、内面には煤が付着している。胎土には砂粒を僅かに含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。西コーナー近くの覆土中（床面上10cm）からの出土である。

第3節 奈良・平安時代の遺構・遺物

（1）住居跡

19号住居跡

遺 構（第9図）

[住居構造] 604Dに切られる。住居南側は調査区域外であり、さらに攪乱により壊されている。確認面と床面がほぼ同じであったため、壁はほとんど確認できなかった。（平面形）方形。（規模）不明×4.85m。（壁溝）確認できた範囲では、カマドを除き巡らされていた。上幅16～22cm・下幅6～10cm・深さ6～12cmを測る。（床面）カマド前面が良く硬化している。（カマド）袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に粘土・小砂利・礫を多く含んだ灰褐色土を被覆し構築していたと思われる。燃烧部は9cm程掘り込まれており、覆土には焼土粒子が多く含まれていた。住居内の攪乱下から検出された焼土は炉の可能性もある。（柱穴）支柱穴は4本と思われ、そのうちの2本が確認できた。深さは55・87cmを測る。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。

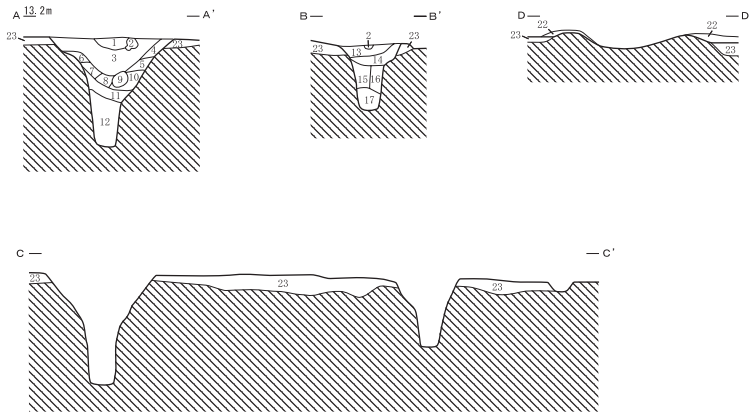
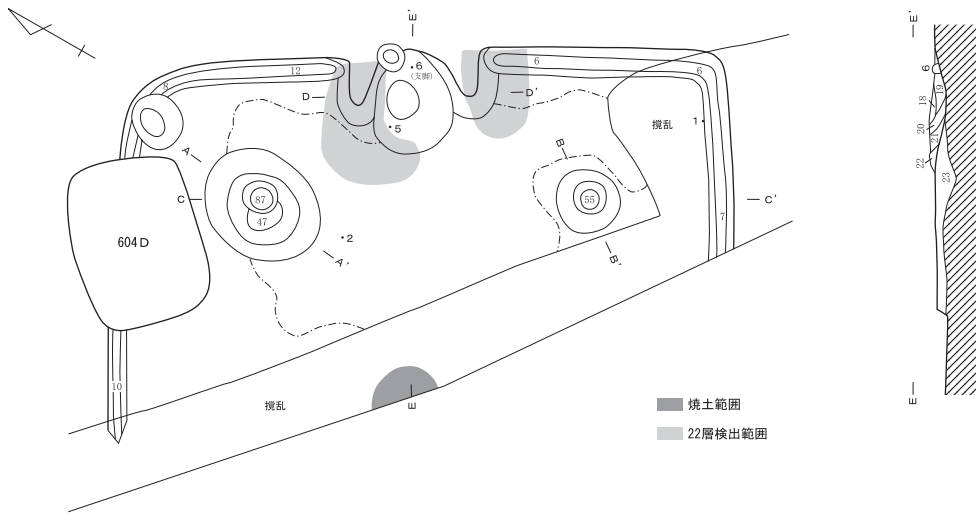
[遺物] 須恵器坏・土師器甕・土製支脚などが出土した。

[時期] 奈良時代（8世紀前葉）。

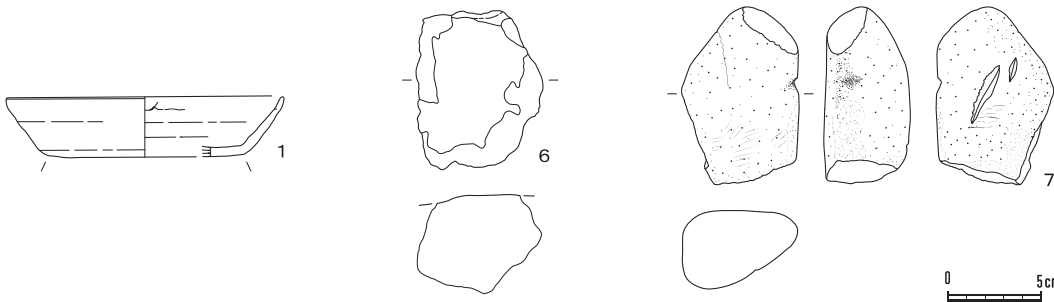
遺 物（第9図、図版4）

須恵器坏形土器（1）

器高3.2cm・推定口径14.8cm・推定底径10.4cm。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒をやや多く含み、



- | | |
|--|--|
| <p>1層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く、ロームブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。</p> <p>2層 ロームブロック。</p> <p>3層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む黒褐色土。</p> <p>4層 ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、焼土粒子を含む明茶褐色土。</p> <p>5層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土。</p> <p>6層 ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む暗茶褐色土。</p> <p>7層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く、ローム粒子を含む暗赤褐色土。</p> <p>8層 焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子を含む暗茶褐色土。</p> <p>9層 淡黄褐色ロームブロック。</p> <p>10層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土。</p> <p>11層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。</p> <p>12層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土(12層より暗色)。</p> | <p>13層 ローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む黒褐色土。</p> <p>14層 ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。</p> <p>15層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。</p> <p>16層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。</p> <p>17層 ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。</p> <p>18層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む暗赤褐色土。</p> <p>19層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く、ローム粒子を含む暗赤褐色土。</p> <p>20層 焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む暗赤褐色土(1・2層より暗色)。</p> <p>21層 焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む黒褐色土。</p> <p>22層 粘土粒子・小砂利・礫を多く、ローム粒子・ローム小ブロックを含む灰褐色土。</p> <p>23層 貼床。</p> |
|--|--|



第9図 19号住居跡・出土遺物(1/60・1/4)

白色針状物質を含む。底部は全面回転ヘラ削り調整が施される。南壁溝の上層からの出土で、遺存度は20%程である。南比企窯跡製品で、広町B窯跡編年のHBⅡ期（渡辺 1990）に比定できる。

土師器甕形土器（2～5）

2・3は長甕、4・5は丸甕と思われる。

2は口縁部小破片で、口縁部は弓状に開く器形で、やや器厚は厚い。色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。内外面横ナデが施される。

3・4は胴部小破片である。3・4は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。内面はヘラナデ、外面はヘラ削りが施される。

5は胴部下半の底部に近い部位であろう。色調は暗橙色を呈し、胎土には砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面は粗いヘラ削りが施される。

土製品（6）

支脚である。現存高8.3cm・現存幅6.8cm・重さ175g。上下も不明な程の破片で、遺存状態は悪く、崩れやすい。カマド坑底からの出土である。

石器（7）

礫であるが、表面に擦痕をもつことから、磨石・砥石などの石器と考えられる。遺存状態の不良な本住居跡からの出土であるため、共伴するかについては不明であるが、ここでは住居跡出土遺物として扱った。長さ9.8cm・幅6.3cm・厚さ3.7cm・重さ298gで、石材は砂岩である。

（2）ピット

1号ピット

遺構（第7図）

〔構造〕19Hを切る。（平面形）円形。（規模）径22cm。（深さ）10cm。（覆土）ローム粒子を僅かに含む黒色土。

遺物（図版4）

武蔵型甕の胴部小破片である。実測はできなかったが、色調は内面が淡茶褐色、外面が黒褐色を呈し、胎土にはガラス質粒子・砂粒を僅かに含む。外面は粗いヘラ削り調整、内面はヘラナデが施される。

第4節 中世以降の遺構・遺物

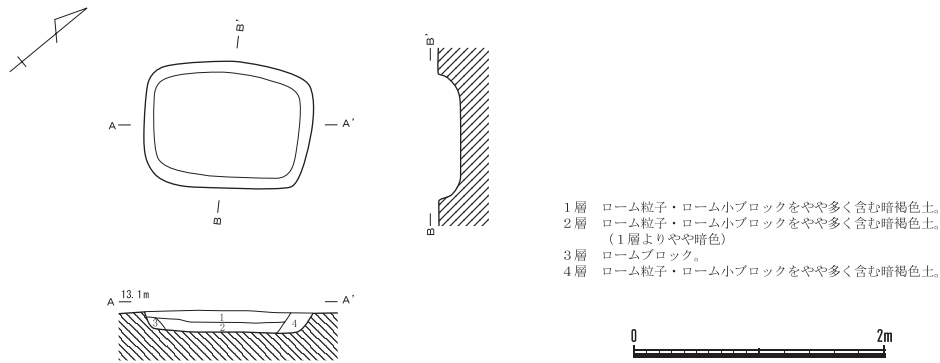
604号土坑

遺構（第10図）

〔構造〕19Hを切る。壁面はほぼ垂直に立ち上がっており、坑底は平坦である。（平面形）隅丸長方形。（規模）1.34×1.00m。（深さ）18cm。（長軸方位）N-44°-E。（覆土）4層に分層される。

〔遺物〕弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器小破片のみが出土し、該期の遺物は出土しなかった。

〔時期〕詳細不明であるが、中世以降と思われる。



第10図 604号土坑 (1/60)

第5節 遺構外出土遺物

ここでは、表土や後世の遺構および攪乱に混入して出土した遺物を遺構外出土遺物として扱うことにする。遺物は縄文前期末～縄文中期前半と弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器片が出土している。

(1) 縄文時代の土器 (第11図1～4)

土器片4点を出土した。

1は半截竹管による斜位の沈線文を交差させて地文とし、2節の結節浮線文を貼付している。明褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

2はRL縄文地に横位の結節文を施文している。明褐色を呈し、胎土には砂粒・細礫を多く含み、金雲母を微量含む。

3は無文の土器片だが、指頭による圧痕が見られる。明褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。4も無文の土器片である。暗赤褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

以上、1は前期末葉の諸磯c式土器、2は前期前葉の五領ヶ台式土器、3・4は中期前葉の所産の土器と考えられる。

(2) 弥生時代後期末葉～古墳時代前期の土器 (第11図5～16)

高坏形土器 (5・6)

5・6は高坏の脚台部破片である。5は現器高3.8cm・推定最大幅7.0cm。一般的な「ハ」字状を呈するものではなく、途中にややくびれをもち、裾部が内湾しながら開くタイプである。小型高坏の類であろう。また、孔が1ヶ所確認できる。外面は赤彩される。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。内面はハケ目調整、外面は横方向のヘラ磨き調整が施される。脚台部を30%弱遺存する。

6は「ハ」字状を呈するもので、外面は赤彩される。色調は暗橙色を呈し、胎土には茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内面は横方向にハケ目調整、外面はハケ目調整後、ヘラ磨き調整が施される。

埴形土器 (7)

口頸部小破片である。色調は暗茶褐色～黒色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。内外面は丁寧にへ

ラ磨き調整が施され、赤彩される。

鉢・高坏形土器（8）

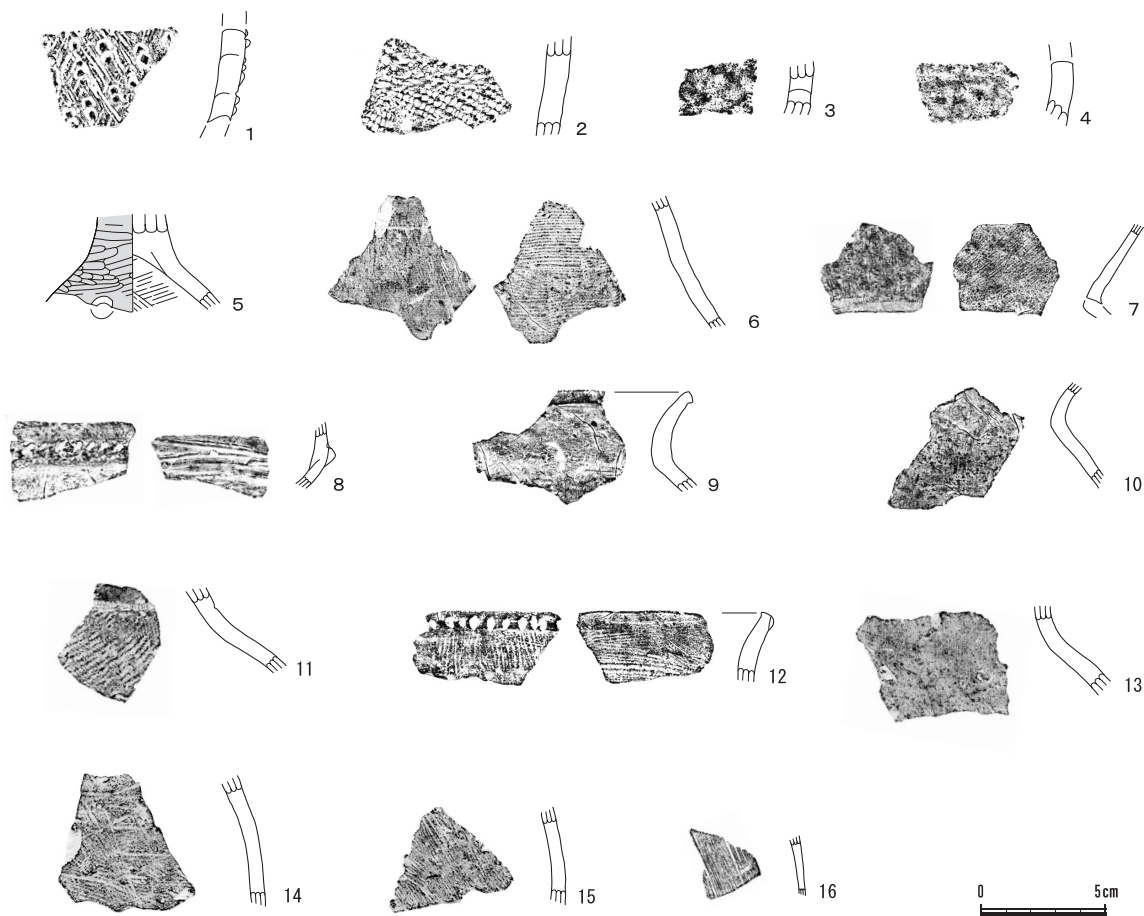
頸部から体部にかけての小破片であろうか。途中に刻みをもつ隆帯が巡らされている。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子を多く含む。内面は粗いハケ目調整が施され、外面は隆帯直上がハケ目調整後横ナデ、直下は器面が摩耗して不明である。内面に粗いハケ目調整が施されることから、甕と思われたが、外面はうっすらと赤彩されることから、鉢か高坏の可能性はある。

壺形土器（9～11）

9は口縁部破片である。「く」の字口縁を呈し、口唇部は平坦に面取りされている。内外面赤彩されることから壺であろう。色調は暗黄褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。口縁部内外面横ナデ、以下内面はへらナデ、外面はハケ目調整が施される。

10は頸部から胴部上半にかけての小破片である。内面頸部と外面は赤彩される。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面は頸部がへら磨き調整、胴部はへらナデが施され、外面は縦方向にへら磨き調整が施される。

11は頸部から胴部上半にかけての小破片である。外面無文部は赤彩される。色調は黄褐色を基調とするが、内面は黒褐色を呈する。胎土には黄褐色粒子を含む。文様は節の大きめなLR斜縄文を施した後上端を櫛状工具による刺突文を巡らしている。縄文施文部の下地にはハケ目痕が観察される。内面は頸部がへら磨き調整、胴部がへらナデが施され、外面無文部はへら磨き調整が施される。



第11図 遺構外出土遺物（1/3）

甕形土器 (12~16)

12は口縁部小破片である。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。内外面ハケ目調整が施される。

13は頸部から胴部上半にかけての破片である。色調は黄褐色を基調とするが、外面は黒褐色を呈する。胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内外面はヘラナデを基本とするが、弱いハケ目痕が見られることからハケナデの類であろう。

14・15は胴部小破片である。14は色調が暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面はハケ目調整が施される。15の特徴もほぼ同様であるが、14に比べ胎土にやや多く黄褐色粒子を含む。

16は胴部小破片で、非常に器厚が薄いのが特徴的である。色調は暗茶褐色を呈し、胎土にはガラス質粒子・砂粒を含む。内面はヘラナデ、外面は斜方向のハケ目調整が施される。S字甕の可能性はある。

第4章 調査のまとめ

(1) 西原大塚遺跡第138地点の40号溝跡について

本地点からは、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の溝跡が1本検出された。この溝跡については、西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査で検出された40号溝跡の東側の延長部分であると考えられたため、40号溝跡と取り扱った。出土遺物には、弥生時代後期末葉～古墳時代前期の壺・甕形土器の小破片が数点出土しただけであるが、比較的安定した状態での出土と思われる。溝跡の構造として、断面形が「V」字状を呈していることから、環壕の可能性はある。

(2) 西原大塚遺跡第154地点の遺構・遺物について

① 弥生時代後期末葉～古墳時代前期の537号住居跡について

537号住居跡の構造は、隅丸長方形の平面形を呈し、規模5.60×5.20mを基本とする。付随施設として、各コーナーに支柱穴、南壁寄りに入口部の梯子穴、入口部右側に貯蔵穴が配置されている。

出土土器には、壺・甕形土器がある(第8図)。壺形土器は無文で外面には赤彩が施されており、1は頸部がやや細頸のタイプである。甕形土器は6がハケ甕で、2は顕著なハケ目調整ではなく、ヘラナデに近いハケナデの類の調整と言える。

また、遺構外出土遺物(第11図)の5の高坏形土器の脚台部は、一般的な「ハ」字状を呈さないことから、廻間遺跡(赤塚 1990)の高坏Cに分類される小型タイプと思われる。11の壺形土器は斜縄文の上端に櫛状工具による刺突文が巡らされており、東遠地域の菊川式土器の要素をもつものと思われる。

① 奈良時代の19号住居跡出土土器と住居跡の時期について

19号住居跡からは、須恵器坏1点(1)と土師器甕4点の土器が出土している。

須恵器坏は、胎土に白色針状物質が含まれることから、南比企窯跡製品と考えられる。器高3.2cm・推定口径14.8cm・推定底径10.4cmを測り、底部は全面回転ヘラ削り調整が施されている。これらの特徴から、広町B窯跡(渡辺 1990)におけるHBⅡ期(8世紀前葉)に比定することができる。

土師器甕は、すべて小破片であり、時期の詳細を設定するのは難しい。ただ、弓状の口縁部をもつ長甕(2)や丸甕(4)は、暗橙色を基調とし、砂粒を多く含む「在地系土師器」(尾形 2006)と考えられ、7世紀代～8世紀前葉の所産と言えるであろう。

以上、本住居跡の時期設定については、最も新しい時期の須恵器坏の年代を基本に8世紀前葉と考えることにした。

[引用・参考文献]

赤塚次郎 1990『廻間遺跡』(財)愛知県埋蔵文化財センター

尾形則敏 2006「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義—武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例—」
『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会設立50周年記念論文集

渡辺 一 1990『鳩山窯跡群Ⅱ』鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山町教育委員会

圖 版



1. 調査区近景



2. 確認調査風景



3. 調査風景



4. 40号溝跡遺物出土状態



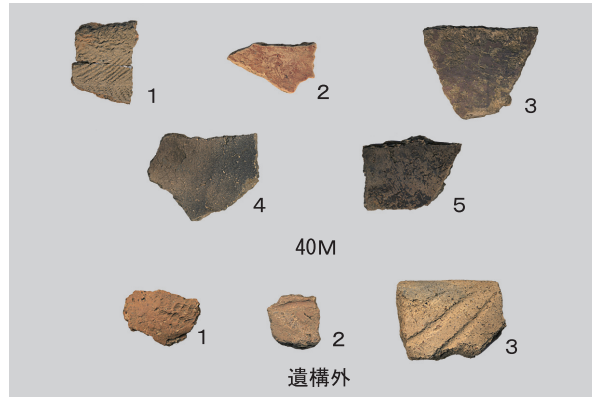
5. 40号溝跡遺物出土状態



6. 40号溝跡



7. 40号溝跡



8. 出土遺物



1. 調査区近景



2. 表土剥ぎ風景



3. 調査風景



4. 537号住居跡遺物出土状態



5. 537号住居跡遺物出土状態



6. 537号住居跡貯蔵穴



7. 537号住居跡貯蔵穴遺物出土状態



8. 537号住居跡



1. 537号住居跡炉跡



2. 537号住居跡炉跡



3. 19号住居跡



4. 19号住居跡P1付近



5. 19号住居跡遺物出土状態



6. 19号住居跡カマド



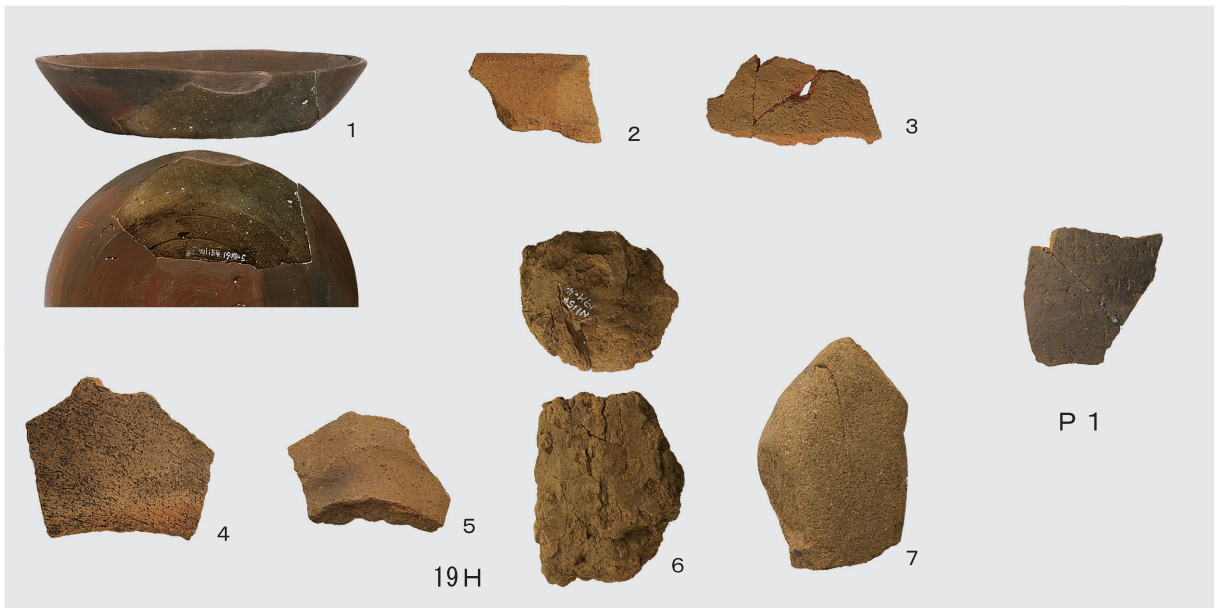
7. 19号住居跡・604号土坑



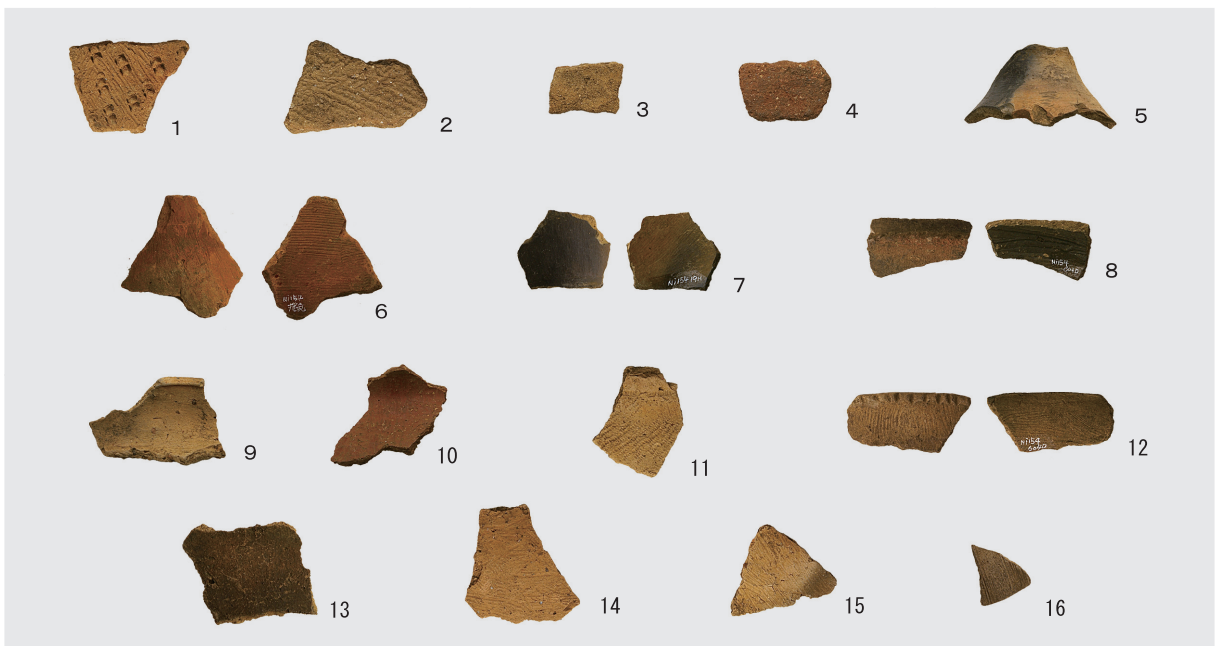
8. 604号土坑



1. 537号住居跡出土遺物



2. 19号住居跡・1号ピット出土遺物



3. 遺構外出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしはらおおつかいせきだい138ちてん にしはらおおつかいせきだい154ちてん はくつちようさほうこくしょ							
書名	西原大塚遺跡第138地点 西原大塚遺跡第154地点 発掘調査報告書							
副書名		巻	次					
シリーズ名	志木市遺跡調査会調査報告	巻	次	第14集				
編著者	尾形則敏 深井恵子 青木 修							
編集機関	埼玉県志木市遺跡調査会							
所在地	〒353-0002 埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号 TEL 048 (473) 1111							
発行年月日	平成20 (2008) 年 6 月30日							
ふりがな 所収遺跡名	しよざいち 所在地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第138地点)	しきしさいわいちよう 志木市幸町 2丁目3064・ 3065 他2筆	11228	007	35° 49' 31"	139° 34' 00"	20070205	674.65	共同住宅建設
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第154地点)	しきしさいわいちよう 志木市幸町 3丁目54街区 9-2・4画地	11228	007	35° 49' 28"	139° 33' 47"	20080317 ～ 20080319	240.20	分譲住宅建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第138地点)	集落	弥生時代後期末葉 ～古墳時代前期	溝跡 1本	土器小片		溝跡(40M)は環 壕の可能性がある。		
にしはらおおつかいせき 西原大塚遺跡 (第154地点)	集落	弥生時代後期末葉 ～古墳時代前期 奈良・平安時代 中世以降	住居跡 1軒 住居跡 1軒 ピット 1本 土坑 1基	土器 須恵器・土師器 土師器				

志木市遺跡調査会調査報告 第14集

**西原大塚遺跡第138地点
西原大塚遺跡第154地点**

埋蔵文化財発掘調査報告書

発 行 埼玉県志木市遺跡調査会
埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号
発 行 日 平成20(2008)年6月30日
印 刷 株式会社 白 峰 社